

論文内容要旨

看護師を対象としたアナフィラキシーショックに関するアンケート調査 —2010 年から 2018 年の推移—

内科学 呼吸器アレルギー内科学 分野 専攻 氏名 木村友之

内容要旨

【背景】アナフィラキシーショックは全ての看護師が遭遇する可能性があり、救急対応を要する病態である。その知識や治療法は医師だけでなく医師以外の看護師を含むメディカルスタッフにも普及していることが望ましい。しかし、以前に同一の施設で施行したアンケート調査では認知度は不十分な結果であった。

【目的】同一の施設に勤務する看護師を対象にアナフィラキシーショックの基本的事項に関する質問を行い、8 年間で知識の習熟度に変化が見られるか調査した。

【方法】2010 年と 2018 年にあそか病院に勤務する看護師に質問票を配布し、集計して得られた結果を上記の 2 年度間で比較調査した。質問表には Q1~Q5 の 5 題を設置した。Q1：回答者の主たる勤務部署、Q2：担当患者のアレルギーに関する問診の程度、Q3：アナフィラキシー（ショック）という用語についての知識の程度、Q4：アナフィラキシー（ショック）に対する第一選択となる治療薬に関する知識、Q5：アドレナリン自己注射（エピペン®）に対する知識の程度を選択肢から回答していただいた。

【結果】アナフィラキシーショックという病名・定義に関する認知度、プレホスピタルケアとしてのアドレナリン自己注射薬の認知度、医療機関での発症例における第一選択薬としてのアドレナリンの重要性に関する認知度が、8 年間で向上していた。

【考察】アナフィラキシーは看護師が遭遇する可能性の高い致死性の疾患であり、診断の迅速性と正確性、適切な処置・加療の実施が求められる。しかしながら、2011 年に世界アレルギー機構（WAO）がアナフィラキシーの判断基準を作成するまでは明確な診断基準が示されてこなかった。そのため、各施設で独自の診断基準が設けられていたり、アナフィラキシー以外の病態として誤診されたりしていた。実際に 2010 年に我々が単一施設で施行したアンケート調査ではアナフィラキシーに対する知識の修得度は看護師として十分とは言えない結果であった。

しかし、今回の調査でこの 8 年間でアナフィラキシーショックに関する知識は看護師にも浸透しつつあることがわかった。その理由として今回アンケートを行った 2010 年と 2018 年の間に 2011 年に WAO から、本邦では 2014 年に日本アレルギー学会からアナフィラキシーガイドラインが刊行され、2011 年にはアドレナリン自己注射薬が薬価収載され、保険適用となったことで報告件数や学会誌に発表されるようになり認知度が増したことがその誘因と推察された。

しかし、未だに十分な状況とはいえず、専門領域の学会あるいは医療機関が企画する講習会などを介して、継続的に啓発を図ることが望まれる。